あ と が き

ベトナム文化情報省の案内でドゥオンラム村を訪問したのは2002年３月、舗装のない道を揺られてハノイから３時間近くかかった。一面水田の広がる中に小高い丘が見え大きな木とひなびた村の門の前に着いた。ラテライトやレンガの塀に囲まれた緩やかな坂を昇ると、古びた民家に囲まれた広場にでる。コ字型の中庭を通して巨大な木造の柱列の集会所も見える。さらに、広場からさらに進むと次々に古井戸や古民家・小集会所が現れる。突然視界がひらけ、溜池こしに緑の小丘陵が見え、左手にはベトナム独立を勝ち取った最初の王・ゴクエン廟の森。溜池に沿うように小径を昇ると道はさらに狭くなりラテライトの塀が両側から迫ってくる。塀に開いた小さな門を次々とくぐると様々な古民家が現れる。

1996年からベトナム各省の古民家洗い出し調査を実施し各省を歩いたが、ドゥオンラム村には１省が誇るすべての古民家が集中したかのごとく感じられた。文化庁に報告するとすぐに調査官が現地を訪問、その後の経緯は本論に紹介されている通りである。

訪問のきっかけは、2002年３月、JICA開発パートナー事業中間検査ミッションに同行しベトナム文化情報省ル・チャン・チュ副大臣と会見中、協力依頼があったことに始まる。もちろんJICAミッションは引き受けられないためそのままとなったが、さらにダンバンバイ文化遺産局長と打合せの折に重ねて依頼があった。その内容は、「文化財単体への予算処置しかなかった文化財保護法を、群としての保存に総合的な予算処置ができるよう改正した。その第一号にドゥオンラム村を選んだ。建築だけでなく道路・観光・無形文化財なども含めて総合的に保存計画を作り予算申請することが必要である。このやり方は私達にとっては初めての経験となるので、是非ご指導いただきたい。」とのことであった。

さらに、文化財保護法改正については次のような説明を受けた。2001年９月、ド・ムオイ共産党書記長が「ベトナムの民主・平等・博愛の基本理念は農村共同体にあり、開発の進行する中で農村集落を生きたまま保存し後世に伝えたい。」という演説を行った。そのため、「この事業は国を上げて取り組む課題であり、事業費はベトナム政府が支出し、日本には技術支援を要請する。」とのことであった。ホイアンやJICA開発パートナー事業とは異なり、経済支援を含まないという意味で、私達には非常に望ましい形の提案であった。

一方、調査研究上の問題はベトナムの開発速度にあった。ハタイ省はハノイ市に隣接し、ハノイ市の新都心として学園都市建設、工場団地建設、リクリエーション施設建設等が急速に進んだ。ドゥオンラム村を取り囲む環境の激変は想像をはるかに超え、2006年3月時点では、ハノイからの1級国道がドゥオンラム村の入り口まで整備され、所要時間は3時間から1時間半に短縮され、周辺の農村は煉瓦造2～3階建ての住宅に置き変った。本研究が、ドゥオンラム村4集落約1千件の民家を約1年半で調査したのは、このような時間との戦いの中でやむなく行ったためである。幸いなことに、2004年12月の本研究の調査報告は、2005年9月にドゥオンラム村・ソンタイ市・ハタイ省により決定された文化財申請の基礎となり、2005年11月文化財国指定、その後の、保存条例制定・保存体制構築へと繋がった。それでも、条例発布までに新住宅の駆け込み建設ラッシュはあり景観上大きな課題となった。

現在の日本の協力課題は、文化財保存修復技術の支援、伝統的衣食の研究と復原活用、祭礼等の復活、観光客の誘致と適切な誘導など。様々な財団や青年海外協力隊・シニアボランティア等の協力も取り込み、協力を推進していきたい。

ドゥオンラム村農村集落保存の最終目標はUNESCOの世界遺産登録で、協力依頼時から「ベトナムで1つは農村集落を世界遺産としたい。」という強い希望があった。これはUNESCOやICOMOSという国際機関の判断が重要な意味をもち、これについても2007年3月に国際会議が予定されている。協力協定の切れる2009年3月を目途に実現するよう努力中で、これが実現すればベトナムの世界文化遺産がフエ王城・ミソン遺跡を含む4件となり、日本はホイアンとドゥオンラム村の2件の世界遺産登録に貢献することになる。

昭和女子大学国際文化研究所
教　授　友田　博通
講　師　マークチャン
事務主任　鈴木　弘三